

## (2) 鷓川高校の実践

### ①高校の状況

むかわ町は、平成 18 年に鷓川町と穂別町が合併してできた胆振管内東部に位置する町で、人口は令和 5 年 11 月末現在で 7,352 人、ししゃもや穂別メロンが特産品となっている。町内の穂別地区で発掘された「むかわ竜」は国内最大級の恐竜化石として、いぶり 5 大遺産<sup>\*21</sup>にもなっている。

町内には、道立高校が鷓川高校と穂別高校の 2 校あるが、穂別高校は令和 7 年度に募集停止が決定されている。鷓川高校への交通アクセスは、令和 3 年に日高線の鷓川－様似間が廃線となり、JR は苫小牧方面のみが運行されている。路線バスもあるため、他町村への行き来が難しいわけではない。特に、近隣の中核都市である苫小牧市には十分通学できる圏内であることから、町内の中学生の進学先は、鷓川高校と苫小牧市内の高校が中心になっている。実際、令和 5 年度の入学者では、町内の中卒者 53 人中、町内への進学は 18 人と、2/3 は町外に進学している現状がある。

鷓川高校は、高校魅力化などの様々な取組を進めている。連携型中高一貫教育実施校<sup>\*22</sup>、チャレンジスタディ、デュアルシステム<sup>\*23</sup>、地域みらい留学 365<sup>\*24</sup>、むかわ学、高・大・地域連携事業<sup>\*25</sup>、コミュニティ・スクール等、チャレンジングな取組を進める高校だ。野球部や吹奏楽部も有名で、甲子園や全国大会に何度も出場している。卒業後の進路も約 1/3 が国公立大学を含めた大学等へ進学するなど、大学進学を含め、様々な進路実現が可能となっている。

これらの多様な取組は、学校の努力や町をはじめとした様々な主体の協力があって成り立っている。高校の存続という点で言えば、町内の中学卒業生の 1/3 しか鷓川高校に残らないにもかかわらず、毎年約 40 人の生徒を確保しているのは、多くの取組により、高校の魅力を発信できているからとも言える。

### ②研究の概要

鷓川高校の令和 3 年時点での取組計画は、以下のとおりである。鷓川高校では、むかわ学・デュアルシステム・地域みらい留学 365 等の地域との活動を本プロジェクトの活動と位置付けているため、各活動には各担当や Co がいるので、大人数が関わっていることになる。それだけ、学校全体で地学協働を進める体制づくりが進んでいるといえる。

#### <令和 3 年時点の取組計画>

月	取 組
1 年次 (R3)	<p><b>【目標】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「むかわ学」等探究学習や「デュアルシステム」等キャリア教育のさらなる充実</li> <li>・探究学習から派生する各種プロジェクトへの人的・経済的支援体制の充実</li> <li>・小中高 12 年間の「むかわスタンダード」の作成</li> <li>・部活動地域移行に係る地域の協力体制の検証</li> <li>・道外推薦制度導入に向けた準備</li> <li>・地域みらい留学 365 の複数名の生徒の獲得</li> </ul> <p><b>【主な取組】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・むかわ学への町民参加及び、デュアルシステム受入企業の拡大</li> <li>・地域人材と協働したプロジェクトの実施</li> <li>・小中高の協働による「むかわスタンダード」作成</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 公営塾の立ち上げと、公営塾スタッフと学校職員との連携体制の構築</li> <li>・ 部活動地域移行の試案作成</li> <li>・ 生徒を主体とした学校の魅力発信による複数名の地域みらい留学365留学生の獲得</li> <li>・ 町内の居住施設等との連携を図り、留学生の最適な環境づくり</li> </ul> <p><b>【検証の項目】</b> ※定量及び定性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域に対する高校魅力化の浸透</li> <li>・ 高校と地域との協働</li> <li>・ 地域外に対する高校魅力化の浸透</li> <li>・ 「地域をキャンパスとした学び」による生徒の変化</li> </ul>
<p>2年次 (R4)</p> <p><b>【予定】</b></p>	<p><b>【目標】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学とも連携した「むかわ学」等探究学習や「デュアルシステム」等キャリア教育のさらなる充実</li> <li>・ 探究学習から派生する各種プロジェクトへの人的・経済的支援体制の充実</li> <li>・ 公営塾の充実</li> <li>・ 小中高 12年間の「むかわスタンダード」をむかわ町教育委員会として決定・公表</li> <li>・ 部活動地域移行に係る協力体制の確立</li> <li>・ 道外推薦制度導入に向けた準備</li> <li>・ 地域みらい留学365への複数名の生徒の獲得</li> </ul> <p><b>【主な取組】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高大連携のもと町民を巻き込んだむかわ学の実施及び、デュアルシステム受入企業の拡大</li> <li>・ 地域人材と協働したプロジェクトの拡大</li> <li>・ むかわ町としての「むかわスタンダード」の決定・公表</li> <li>・ 公営塾の効果的運用</li> <li>・ 部活動地域移行に係る協力体制確立</li> <li>・ 生徒を主体とした学校の魅力発信による複数名の地域みらい留学生の獲得</li> <li>・ 道外推薦入学に対応しうる受け入れ体制の環境整備（寮、町親、受入後の年間計画）</li> </ul> <p><b>【検証の項目】</b> ※定量及び定性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域に対する高校魅力化の浸透</li> <li>・ 高校と地域との協働</li> <li>・ 地域外に対する高校魅力化の浸透</li> <li>・ 「地域をキャンパスとした学び」による生徒の変化</li> </ul>
<p>3年次 (R5)</p> <p><b>【予定】</b></p>	<p><b>【目標】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学とも連携した「むかわ学」等探究学習や「デュアルシステム」等キャリア教育のさらなる充実</li> <li>・ デュアルシステムへの参加によるUターンを含めた地元就職者の増加</li> <li>・ 地域人材と協働したプロジェクトの拡大</li> <li>・ 公営塾の発展</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部活動地域移行の確立</li> <li>・道外推薦制度導入に伴う生徒募集の開始</li> </ul> <p>【主な取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・町民を巻き込んだむかわ学の実施及びデュアルシステム受入企業の拡大</li> <li>・地域人材と協働したプロジェクトの拡大</li> <li>・公営塾の対象者の拡大と、コワーキング・スペースへの発展準備</li> <li>・部活動地域移行の確立</li> <li>・生徒を主体とした学校の魅力発信を行い、道外推薦制度導入に伴う生徒募集の開始</li> </ul> <p>【検証の項目】 ※定量及び定性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域に対する高校魅力化の浸透</li> <li>・高校と地域との協働</li> <li>・地域外に対する高校魅力化の浸透</li> <li>・「地域をキャンパスとした学び」による生徒の変化</li> </ul>
--	---

（令和3年度北海道 CLASS プロジェクト実施計画書 北海道鷓川高校）

これらの多様な活動では、町や町教育委員会はもとより、多くの機関が関わっている。高校の魅力の一つに、活発な部活動と進路実現が挙げられるが、それらについても、学校自体の努力の他に町からの環境整備や公設塾設置などの大きな支援がある。こうした地学協働の意識や体制が基盤となって、学校の主体性のもと、様々な活動が展開されている。

一方、学校の地域活性化・「地域への」人材育成という、地域貢献意識と町・地域の意識は、必ずしも合致していないところもある。学校としては、デュアルシステム等で生徒と地元業者のつながりを強め、卒業後、地域に残る人材として育成したいという思いがあるが、町内業者の体力から、長期にわたる研修受け入れとなるデュアルシステムについて、町内での広がりには難しい状況がある。地域に人材を残すために大きな意味を持つデュアルシステムが、町内でさらに広がらないのは、高校としては、もどかしさがあるだろう。高校卒業直後に地元に残らなくても、後にUターンしてくるマインドを持った生徒を育成していると捉えるなど、長い目で見ていくことが大切かもしれないが、地域貢献意識と地域の状況が噛み合っていない状況はもったいなさがある。もし、町が地元に残るための受け入れ補助を企業に出すなどの財政的な支援ができる状況があれば、地元に残る人が増え、徐々に地域活性化の種をまくことにつながるかもしれないが、その辺りの動きが顕著には出ていないのが現状である。

### ③推進体制

鷓川高校の地学協働推進体制として特徴的なのは、学校体制である。これだけ多くの活動を進めるには、学校体制がしっかりしていないと持続できない。これまでの他校の事例でも、教職員の反発意識が課題となっている場合があるが、鷓川高校ではどのように体制整備を行ってきたのだろうか。教職員の意識変容は、どのように進められてきたのかについて見ていきたい。

学校の地学協働体制は、現在分掌に位置付けているため、業務として担当者がある状況（デュアルシステムは●●教諭、むかわ学は▲▲教諭といった要領）であり、全教職員が共通理解のもと、学校の体制として整理されている。石田教頭は、この体制の変革期に鷓川高校の教諭から教頭になるなど、鷓川高校の様々な取組や変化を見てきていて、教職員の意識の変遷過程を次のように語っている。

「分掌に位置付くまで8年かかった。当初先生方は猛反対。その中で、核になる先生数人でプロジェクトチームをつくり、少しずつ進めていくが、他の先生方からは、仕事量が増えることとそれを誰がやるのかということへの懸念があった。その後、ワーキンググループとして、3年間全職員が関わるようになり、ようやく分掌に位置付けることとなった。重要なのは『ミッションの共有』。学校存続のために地学協働を進めることがミッションなのだという共通理解。そして、先生方が地学協働の楽しさや生徒の変容を感じてきて、具体的に総合型選抜や就職に使えることがわかれば、地学協働をする意味を先生方が理解してくれる。生徒は、地学協働の探究を経験することで、自分の言葉で地域創生を語れるようになる。これが進路実現に活きる。」

教職員の意識は、活動をとおして変わっていくところもある。活動により、生徒が変容する・活動の楽しさを知ること、教職員も地学協働の効果や意味を理解していく。特に、地域学校協働活動により、「社会」を体験的に学ぶことが総合型選抜や就職などの進路指導に生きてくることが実感できれば、地学協働に意義を感じ、生徒の育成に必要な活動だという意識に変容していく。そのためには、「活動」をどうスタートさせて、それに教職員がどう関わっていくようにしていくか、そのプロセスが重要であろう。鷗川高校の場合、

- ①コアメンバーによるプロジェクト
- ②全教員のワーキンググループ
- ③分掌への位置付け

の流れであった。コアメンバーは、生徒のために新しいことを取り入れる意欲や活力がある若手教員のほか、課題意識の高い教員が中心になるだろう。コアメンバーで活動を進める中で出てきた成果をもとに、全職員が関わりを持つように体制を構築していく。教職員への理解を深めていくための一つの方法として、参考になる事例である。

このほかに学校には、地域みらい留学のCoと地域学のCo（地域おこし協力隊）があり、高大地連携事業（一般社団法人北海道総合研究調査会）で札幌大学（むかわ町、鷗川高校と包括連携協定を結んでいる）の学生が活動に関わっているし、公営塾も整備されているなど、探究以外にも様々な地域学校協働活動を実践する体制が整備されている。

#### ④活動

鷗川高校では、非常に多様で積極的な地域学校協働活動が行われているが、ここでは、特に地学協働による探究である「むかわ学」（平成29年度開始）の活動を見ていくことにする。

令和4年度のむかわ学では、「むかわの観光と福祉」の体験的な学びのほか、地域課題ごとの以下のゼミに分かれ探究を行っている。

##### <むかわ学II>（2年生）

- 1 日高・胆振サラブレッドツアー企画
- 2 空き家ビジネス・廃材活用
- 3 むかわ町 PR 動画作成
- 4 防災×Minecraft イベント企画 防災マップ作り
- 5 鹿対策 ズビエハンバーグ&鹿避けロボット
- 6 む〜ぶと子どもの健康増進
- 7 町民参加大イベント企画



↑ 探究から派生したコスプレイベント

8 ふるさと納税返礼品となる特産品商品開発

9 むかわ牛寿司商品開発

<むかわ学Ⅲ>（発表：3年生）

1 むかわ winter キャンプ 2022!～冬のむかわを盛り上げよ～

2 プリプリプリクラ in むかわ

3 町を巻き込め！むかわコス

4 むかろんぱんで町おこし～むかろんと共に～

5 Mumu Crepe～むかわと夢のクレープ～

6 奴らが来る・・・

7 チーズハンバーグ～鹿と未来を添えて～

8 むかわカレー

9 フードロス対策

10 むかわの人口増加に向けて



これらのゼミごとに、関係各所のヒアリングやアンケートの作成から実施まで、生徒が主体的に探究を進めている。テーマを見てもわかるとおり、むかわ町の特徴的なもののほか、特産品づくりや地域課題に関わることなど、生徒の主体的な課題意識に係る探究を進めている。

具体例として、観光分野の探究からむかわでコスプレイベントを企画した事例を紹介する。

当初、2人の生徒がハロウィンに合わせた仮装イベントを考えていたが、コロナ禍で実施を断念していた。そうした状況にあって、外部講師の地域のお寺の住職が生徒の思いを汲んで「実施に向かってみよう」という働きかけをしたことで、下級生も加わり、有志のプロジェクトとして再始動した。

講師のお寺や廃線となった線路の使用許可を得て、イベント告知の撮影会を実施するなど、生徒の「やりたい」を大人と一緒に実現していく活動が展開されている。高校生の若いエネルギーやアイデアを実現することで、魅力的な地域イベントを実施し、町外からも人が訪れるなど、「まちを盛り上げる」「まちを活性化する」といった社会参画の成功体験につながる探究となった。

こうした探究が形になって、課外活動も含めて広がりを見せながら展開されることで、生徒の成長を地域で支援していく学びの場となっている。3年生の最後には、これまでの探究を町長への提言としてまとめ、町民への発表を行うなど、課題発見→探究→実施→まとめ・表現と一連の学びのプロセスが展開されている。

### ⑤ 3年間のまとめ

<成果>

- ・多様な連携先と様々な取組を進めているため、多くの協力を得られる関係性を構築している
- ・大学生との関わりも有用
- ・学校体制づくりとして、  
コアメンバーによるプロジェクト → 全教員のワーキンググループ → 分掌への位置付けの流れで、学校全体で持続可能な体制づくりを進めている
- ・体制構築で重要なのは「ミッションの共有」。なぜ、それを進める必要があるのか、共通理解を図る
- ・教職員の意識は、活動をとおして、生徒が成長し、進路指導に活きるなどの成果が見えること
- ・地域を学びの場とした教育課程の定着

- ・町との連携で地域みらい留学生獲得の環境整備
- ・むかわ学の探究サイクルの確立
- ・地域でのデュアルシステムの定着
- ・公営塾を活用した進路実現
- ・高大地連携体制の構築により、札大生が継続的に協力

<課題>

- ・探究での公営塾の活用
- ・地域に評価される学校づくりに資する地学協働のさらなる充実

⑥資料（資料編に掲載）

- |   |   |       |                                 |
|---|---|-------|---------------------------------|
| 鵜 | 1 | 令和3年度 | 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第1次》 |
| 鵜 | 2 | 令和3年度 | 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第2次》 |
| 鵜 | 3 | 令和3年度 | 北海道 CLASS プロジェクト実施報告書（1年次）      |
| 鵜 | 4 | 令和4年度 | 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（2年次）      |
| 鵜 | 5 | 令和4年度 | 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（2年次）    |
| 鵜 | 6 | 令和5年度 | 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（3年次）      |
| 鵜 | 7 |       | 全道地学協働活動研究大会発表資料                |
| 鵜 | 8 | 令和5年度 | 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（3年次）    |